

版於1978年，已經是40年之後的事，尚且如此，其他更不用說了。現在因為《灌堂先生日記》的出版，我們才得以見到更多的真象。

一新會所立下的典型毫無疑問的是一種「公民社會」的嘗試。今後台灣民主化的繼續發展就要維賴類似的組織和努力。

《師大臺灣史學報》  
第2期 頁227-240  
2009年3月  
國立臺灣師範大學臺史所

## 「台湾近代史」と4人の日本人 後藤新平・岡松参太郎・新渡戸稻造・矢内原忠雄\*

春山明哲\*\*

### 第1回 後藤新平と岡松参太郎—「文明」と「学問」—

ただいまご紹介いただきました春山明哲と申します。

はじめに、本日このような機会を設けていただいた蔡錦堂先生と呉文星先生にお礼申し上げます。台湾史研究の台湾における大きな拠点である師範大学で、このような演講を行うことは、私にとって大変名誉なことだと感じております。

私、今年の9月半ば過ぎに台湾に参りまして、現在、国立政治大学台湾史研究所の客員（客座）教授として「帝国日本の台湾統治政策」について講義を担当しています。年末までの予定です。

昨年（2007年）の春、33年間勤務した国立国会図書館を定年退職し、早稲田大学台湾研究所の客員研究員となりました。また、日本台湾学会理事長、早稲田大学の非常勤講師の肩書きもありますが、本日は、ここにお集まりの皆様と同じ、ひとりの研究者としてお話しいたします。

\* 2008年11月28日於國立臺灣師範大學臺灣史研究所特別演講

\*\* 早稲田大学台湾研究所 客員研究員

## 1. 「台湾近代史」とはなにか

本日私がお話しするテーマは、「台湾近代史」と4人の日本人、というものです。当初は、先日国立中央図書館台湾分館でお話した「植民地統治と文明・学問・信仰の関係について」<sup>1</sup>というテーマをもう少し詳しく展開するつもりでいました。しかし、今回は師範大学の台湾史研究所と歴史系の院生の皆さんが主な聴衆ということでした。また、台湾に来ましてから講義を行い、シンポジウムや研究会などに参加しましたので、それらの内容を総合したいと思いました。そのようなわけで、まずはじめに、「台湾近代史とはなにか」という問題を設定することにしました。

「正面」からの、少し「上段の構え」のテーマですが、私なりの「研究的雑談・感想」のようなものですから、気楽にお聞きください。

さて、「台湾近代史」とはなんでしょう。今、これを「台湾」と「近代」と「歴史」の三つに分けて考えてみたいと思います。

まず、「近代」から行きましょう。少し思い出話になりますが、1970年代から80年代まで、日本には「台湾近現代史研究会」というものがありました。今は亡き戴國輝博士が中心になり、若林正丈先生（東大教授）や松永正義先生（一橋大教授）、そして私も参加したこの研究会については、ご存知の方も少なくないと思います<sup>2</sup>。

当時、私達は台湾史研究の雑誌を作ろうと考え、その名称を検討しました。私の記憶では、はじめに考えたのは「台湾近代史研究」だったと思います。ところが、「近代」という歴史用語は、日本では普通、明治維新から1945年の敗戦までの期間を指す言葉ですので、戦後の台湾を研

究対象とする場合には「現代」があったほうが良い、という理由で「近現代史」という言葉を採用しました。多分、当時としては珍しい用語だったと思います。

雑誌には「英文タイトル」も付けたかったので、この「近現代」という言葉を、英語では一語で“Modern times”ということにしました。なんだかチャップリンの有名な映画の題名のように、妙な感じもありました。

さて、歴史的時期区分としての「近代」とは、いつからいつまででしょうか。日本では明治維新から敗戦までですが、中国（中華人民共和国）では、1840年の「阿片戦争」から1919年の「五四運動」までが「近代」で、以後は「現代」または「当代」と言うようです。

では、「台湾」の近代とは、いつからいつまででしょうか。「中華民國史」における「近代」の時期について、私は不勉強で知らないのですが、「台湾」と「中華民國」の「近代」とは同じでしょうか。同じならなぜでしょうか。また、異なっているのなら、なぜでしょうか。断っておきますが、これは「政治的」な問いではなく、あくまで「歴史学」からの設問です。

こうなりますと、第二の問題である、「台湾」とはなにか、ということについて考えなくてはならない、と私は思います。（皆さんの答えは、あとで質問の時間に、聞かせていただきます。）

私達が「台湾近現代史」という研究領域を設定したときの主な問題意識は、日本の植民地であった時期の「台湾史」を、「まともに」、「正面」から考えたい、というものだったと思います。「台湾史」を「中国史」の一部ではなく、「日本史」の一部でもなく、しかし、近代日本や近代中国の歴史とも「重なる」部分を持つ、独自の研究対象として考えよう、という視点だったと記憶しています。

さて、「台湾」を歴史学的に定義すると、どうなるでしょうか。時期区分とも重なりますが、よく見られるのは「政権」による定義です。

1 「台湾学研究国際学術研討会：殖民與近代化」（2008年11月7-8日、国立中央図書館台湾分館）  
2 春山明哲『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究—』（藤原書店、2008年）所収の「台湾近現代史研究会の思い出」参照。

台湾を支配した政権、大きな影響を与えた国を冠して、「オランダ時代」、「鄭成功時代」、「清朝時代」、「日本時代」、「中華民国時代」の「台湾」という風に定義するのです。これは、政治史研究の上では便利ですが、社会史、経済史、文化史の視点からは、必ずしも十分な定義とは言えませんね。例えば、「台湾原住民」の視点から見たら、この区分は随分使いにくいのではないかと想像します。

もうひとつは、台湾の「島」としての「地理学的」定義です。「地域研究」といわれるものも、「島」とその「住民」の範囲を一応想定していると思います。しかし、対岸からの「漢族」の移住と開拓ということを考えてだけでも、台湾という「島」とその「住民」の歴史では、視野が狭すぎることは明らかでしょう。

つまり、「台湾」とはなにか、という問いには、それを見る視点の問題が含まれているのです。言い換えると歴史を研究する「主体」が誰であるのか、その「歴史家」「研究者」がどのような史観と方法で研究するのか、ということが問題となるのです。

そこで、「歴史とはなにか」、「歴史家」（歴史研究者の「卵」や「ひよこ」も含めて、こう言いましょう）の仕事とはなにか、という第三の設問が出てきます。

「歴史とはなにか」という問いで私が思い出すのは、イギリスの歴史家、E.H.カー（Edward Hallet Carr, 1892~1982）の『歴史とはなにか』（岩波新書、1962年）という本です。この本は、カーの1961年のケンブリッジ大学での講演“What is history?”を社会学者の清水幾太郎（1907~1988）が翻訳したもので、「歴史とは現在と過去との対話である。」というカーの言葉は、大変よく引用されています。中国語の翻訳もありますね。

この「現在と過去との対話」という定義も素晴らしいものだと思いますが、私が歴史の研究をはじめたころ、考えさせられ、また、魅力に

感じたのは次の言葉です。今正確に引用できませんが、「歴史とは、歴史家が研究している時代の思想を歴史家の心のうちに再現することである」という箇所です。「歴史とは、歴史家が書くところのものである」といった趣旨のところでした。カーは、ここで、歴史の叙述における「客観性」と「主観性」の関係の問題を検討しているのですが、私は単純にも「歴史とは、歴史家が書くところのものである」というふうに理解してみました。

そのころ（今でもそうでしょうが）、「客観的な歴史」とか「歴史は科学でなければならない」とか言われていましたから、「なーんだ。どんな歴史も書かれたものである以上、書いた人がいるのだ」という「明白な事実」に気がついたのです。

「歴史とは、歴史家によって、歴史として叙述されたものである。」として、では、「歴史の叙述」とはなんでしょう。

私の考えでは、「歴史の叙述」とはなにか、ということについて考えながら研究する人が「歴史家」「歴史研究者」である、と言ってもよいのではないかと、思います。

この辺で、「台湾近代史とはなにか」、という設問に答える、というよりも、この設問の持つ意味を考えてみましょう。「台湾近代史」とは、歴史家が「台湾」と「近代」を考察しながら、「歴史」として叙述するものである。これでは答えにはならないかも知れませんが、少なくとも、この意味を考え続けることはできますね。

私は私の本の中で書いたように、「台湾」について、「近代日本」から「台湾」へ、という視点から研究してきました。帝国日本による植民地台湾の統治政策の研究は、大体そういうベクトル（方向性）を持っています。

では「近代」とは私にとってなんでしょう。これは大変難しい問題ですが、ここ6~7年の間、私は「文明・学問・信仰」というキーワード

といいたまいますか、コンセプト（概念）といいたまいますか、この視点を基本に考えてきました。「文明」、「学問」、「信仰」のいずれも「近代」の構成要素（あまりうまい表現ではないかも知れませんが）だと思えます。「植民地統治と文明・学問・信仰の関係とは、日本統治下の台湾において、どのようなものであったのか」というのが私が関心を持っているテーマです。このことを考察する上で重要な人物と考える日本人が何人かいるのですが、そのうち今日は、後藤新平と岡松参太郎を取上げてみたいと思います。

## 2.後藤新平について—文明と学問—

後藤新平が亡くなったのは、1929年（昭和4）の4月でした。葬儀は東京の青山墓地で行われましたが、満開の桜が散り始めていて、後藤の側近の一人だった永田秀次郎（東京市長）が「花吹雪 日本淋しくなりけり」という句を残しています。この「淋しい」という感情は、後藤を知る多くの人々に共有されていたと見えます。後藤と親交のあった徳富蘇峰（1863~1957、ジャーナリスト・歴史家）も、「わが日本帝国は淋しくなった」と書いていますし、後藤の伝記編纂会の趣意書にも「社会に大きな寂寞を加えた」とあります<sup>3</sup>。

この1929年という年は、次回お話しする矢内原忠雄が『帝国主義下の台湾』を出版した年でもありますし、その前年には伊能嘉矩の『台湾文化志』が民俗学者の柳田国男の尽力で世に出ています。矢内原は、伊能の本は「清国治下の台湾」を主題とし、自分の本は「日本治下の台湾」を主題とするもので、時代として接続している、と「序」で書いていま

3 前掲、春山『近代日本と台湾』所収の「『後藤新平伝』編纂事業と〈後藤新平アーカイブ〉の成立」参照。

す<sup>4</sup>。翌年の1930年には霧社事件が、31年には「満洲事変」が勃発しますね。そして、いうまでもなく、1929年10月は、アメリカはニューヨークのウォール街で株が大暴落し、世界恐慌の時代が到来します。

こうしてみると、私には、1929年から30年あたりが、台湾の「近代」が終わり、「現代」が始まる、というように見えます。

さて、後藤新平にもどります。

後藤新平が、児玉源太郎台湾総督のもとで台湾総督府の民政長官（当初は「民政局長」）を務めたのは、1898年（明治31）から1906年（明治39）まで、足掛け9年でした（1908年まで顧問）。

後藤が主導した台湾統治の事績については、いろいろな評価があります。有能な植民地行政官として「台湾の近代化」の基礎を築いた、という肯定的なニュアンスの評価もありますし、阿片漸禁政策や「土匪」（抗日ゲリラ）鎮圧に辣腕を振るった帝国主義者という評価もあります。

私の見るところでは、後藤の政策は現代的な用語では「開発独裁」というイメージに近いのではないかと、思っていますが、後藤については評価の前にもっと実証的な研究を深めることが先決でしょう。

私がかねてから疑問に思っていたことは、「なぜ後藤は、あのような台湾経営を手がけたのか」ということです。「あのような」とは、以下の事業の全体を指します。なお、この「分類」は、中央研究院台湾史研究所の国際シンポジウムにおける私の発表に基づくものです<sup>5</sup>。

4 矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」『矢内原忠雄全集第2巻 植民政策研究Ⅱ』（岩波書店・1963年）p.179.

5 春山「後藤新平の台湾経営と帝国日本の『学知』の系譜—比較植民地研究への基礎作業として—」（2008年10月30-31日、中央研究院台湾史研究所）

[社会治安の確保]

- ・抗日武装勢力（「土匪」）の鎮定による治安の確保
- ・警察制度及びその補助機構としての保甲制度の確立

[財政金融制度の確立]

- ・台湾事業公債法、20ヵ年事業計画の立案と実施
- ・台湾財政の「独立」（国庫補助金の削減・廃止）
- ・台湾銀行の設立

[インフラストラクチャー（社会基盤）の整備]

- ・土地調査事業
- ・縦貫鉄道、基隆築港の着手
- ・道路、上水道、下水、航路、郵便、通信の整備

[経済産業政策]

- ・阿片、樟腦、塩の専売事業
- ・糖業の改良・近代化
- ・米作の改良、茶業の振興
- ・林業（阿里山）、鉱業の開発

[社会・教育政策]

- ・衛生行政、医療制度、医学教育の開始
- ・教育制度の導入

[調査・研究事業]

- ・台湾旧慣調査、統治制度改革着手（「六三法」に代わる立法構想）
- ・戸口調査（センサス）
- ・試験研究機関の設置（農業、衛生、物理、化学、工業等）

この一覧表を眺めていると、これは「文明のワンセット」と言えましょう。明治維新以来の日本の「文明開化」「富国強兵・殖産興業」の縮図のような印象もありますし、日本本国では未だ着手されていない、都

市計画的な事業や国勢調査もあります。

児玉・後藤が着任した当時の台湾は、各地で抗日勢力の武装反乱が相次ぎ、財政的には破綻状態で、台湾への補助金は本国の財政を圧迫していました。本国の資本家達も台湾に投資することを躊躇し、台湾銀行の資本金も集まらない有様でした。「台湾売却論」すら出ていたのです。本国政府も日清戦後経営を進めるために、本国を優先し、台湾は後回し、という考えが主流であったようです。

要するに、台湾において積極的な経済開発を進める条件は、なにひとつなかった、と言っても過言ではないでしょう。では、なぜ後藤は台湾に「文明」を持ち込もうとしたのでしょうか。

このことを考えるためには、後藤の「思想」を検討する必要がある、と思います。

後藤の思想については様々な角度からの検討が可能ですが、ここでは主として彼の「文明観」及び「学問観」について、それも台湾に係わるまでの時期について、ごくかいつまんでお話ししたいと思います<sup>6</sup>。

後藤新平は、1857年（安政4）に、日本の東北、今の岩手県（奥州市水沢区）に、武士の家庭に生まれ、11歳のとき明治維新を迎えます。東北の諸藩は幕府方でしたので、官軍に反抗した者として、維新後の新政府は抑圧的な政策を取りました。後藤も「逆賊」の子供として苦労したようです<sup>7</sup>。

この「東北出身」という条件は、後藤の生涯を考える上で重要です。明治維新の原動力となった長州や薩摩出身の青年とは異なり、東北出

6 前掲、春山『近代日本と台湾』所収、「後藤新平の台湾統治論・植民政策論—「政治思想」の視点からの序論—」参照。

7 後藤新平については、鶴見祐輔著・一海知義校訂『〈決定版〉正伝 後藤新平』全8巻（藤原書店・2004-2006年）、御厨貴編の別巻『後藤新平大全』（藤原書店・2007年）参照。

身者は「立身出世」の道は狭く、実用的な学問、専門的な技術という能力がなければ「社会的な上昇」は困難でした。ちなみに、のちに、「平民」として最初の首相になった原敬も岩手県の出身です。原と後藤の比較は、その植民地思想を含めて、非常に興味深い主題ですが、今日は上げません<sup>8</sup>。

後藤は教養のある武家の子弟として、儒学、漢詩・漢文、国学、和歌などの素養を身に付けましたが、明治維新後、16歳のときから、彼は「西洋の新式」の学校に入りなおします。そこで彼は医学や自然科学を学び、「文明」と出会います。外科医を目指したのは、周囲の勧めもあったようですが、後藤自身は、「台湾出兵」（明治7年）や「西南戦争」（明治10年）の影響があったと言っています。

医師（外科医）となった後藤は、19歳で名古屋に行き、愛知県病院に勤務し、24歳という若さで病院長兼学校長となります。日本の近代化とは、このような「速成」でもありました。

名古屋時代に後藤は、オーストリア人の医師に出会い、衛生行政や裁判医学に関心を持つようになります。26歳のとき、内務省衛生局長の長与専斎の勧めで、東京に出ます。この内務省衛生局時代の、36歳までの10年間は後藤の思想形成にとって、決定的な時期だったと思いますので、のちほど申し上げます。

後藤は33歳のとき、ドイツに留学し衛生制度、社会政策、統計学などを学び、ビスマルクの社会政策に興味を持ちました。医学博士号を取得したのち帰国し、内務省衛生局長に就任します。ところが、「相馬事件」というものに巻き込まれ、半年間監獄に繋がれ、職も失うことになります。いわばすべてを失ったわけです。

<sup>8</sup> 前掲、春山『近代日本と台湾』所収、「明治憲法体制と台湾統治—原敬と後藤新平の植民地政治思想—」参照。

裁判闘争の結果無罪を勝ち取った後藤を「拾った」のが、石黒軍医総監で、彼は後藤を児玉源太郎に紹介して、日清戦争の帰還兵の検疫を実施することになります。この検疫事業の成功によって後藤は内務省衛生局長に復帰し、ほどなく「台湾阿片制度に関する意見」を伊藤博文首相に提出しました。

これが、後藤が台湾と本格的に関係するようになったきっかけです。

このように見てきますと、後藤の「文明観」について、いくつかの点を指摘できると思います。

第一に、明治初期の青年達の多くがそうであったように、後藤が「文明」を積極的に評価していることは明らかです。また、西洋の「文明」の推進力として科学や技術（医学もそのひとつです）の重要性に着目していることも、これは当然といえましょう。

第二に、これは後藤の「独自性」といってもよいかと思いますが、「社会」を重視したことです。これを私は後藤における「社会の発見」と形容しました。後藤にとって社会とは、ふたつの特性を持つものだ、と私は解釈しています。

ひとつは、後藤は早くから「社会」の持つ「慣習」と「自治」、言い換えると「その社会が伝統的に形成した自律のメカニズム」を重視しています。例えば、内務省衛生局に移った頃、彼は地方の衛生状態の調査を行い、地域社会の「慣習」と「自治」に注目しています。

もうひとつは、政策の対象としての「社会」です。さきに述べた『国家衛生原理』の中で、後藤は国家と個人の間中間的な存在として「社会」を重視しています。さらに後藤は、ドイツ留学の体験によって、「社会政策」の重要性を認識しました。労働者疾病保険制度や社会事業についての構想も、当時の日本としては早かったと思います。

第三は、後藤の「経済思想」です。この点はこれまでの後藤研究ではあまり注目されていなかったと思います。

後藤は『国家衛生原理』の中で、英国の統計学者で医学博士であるウィリアム・ファルの著作『生命統計学』から、「人口の経済的価値」、「殖民と本国の資本関係」に関する議論を紹介しています。後藤はのちに、この著作から「植民と人生との深遠偉大なる相関」を知った、「このために台湾領有後、私は当時の植民政策論者とは全く根本を異にする地点から、植民政策に関与するに至った」、つまり「生物学的な変化から台湾を考察し、常にこの方法を持って進んだ」という風に述べています<sup>9</sup>。

後藤は少年の頃、統計、数学、測量などを得意科目としていました。彼の意見書とか構想を見ますと、統計的議論がよく出てきます。後藤の「経済学」については、私はまだ研究中なのですが、彼の台湾経営を考えるとき、この点の検討は欠かせないと考えています。

つぎに、後藤の「学問観」について、簡単に述べます。彼は「学俗接近」という言い方を好みました<sup>10</sup>。学者が「世間」、実社会と隔絶して「高尚な」学問に閉じこもることを批判しているわけです。しかし、学問的な調査研究に基づいて政策を立案することを大変重要と考えています。「台湾統治の大綱」という初期の政策文書を見ますと、統治方針については「調査研究の上」追ってこれを定める、としています。

その代表的な例が、台湾旧慣調査です。法学者の岡松参太郎をはじめ、当時の京都帝国大学の教授、助教授が大勢動員されています。また、農政学者の新渡戸稲造を糖業政策の立案者として迎えたことも、彼の学問観を表していると思います。

岡松にしても、新渡戸にしても、当初、植民地台湾についてはまった

く知識も経験もありませんでした。彼らの起用は後藤にとって、一種の「賭け」の側面があったと思います。後藤は、彼らの経験ではなく、学問の原理や方法を政策立案に適用しようとしたのだと思います。

### 3. 岡松参太郎—学問—

岡松参太郎は、私の研究史において、格別の存在です。

今から20年ほど前に、「台湾旧慣調査と立法構想」という論文を書き、合わせて「岡松参太郎略伝」をまとめました<sup>11</sup>。その時、岡松のお孫さんにあたる方に、岡松関係の資料があるかどうか伺ったのですが、ありません、というお答えでした。それから10年経って、国立国会図書館の収集部にいた私に連絡がありまして、岡松家から資料の寄贈の話が来ているから、対応して欲しいとのことでした。カメラを抱えて目白の岡松家に伺い、大きな物置を開けてみて驚きました。参太郎が遺した膨大な量の資料があるではありませんか。岡松家では、資料を一括して保存するために、その存在を公表しなかったとのことでした。

この岡松文書については、いろいろな経緯があって、結局、早稲田大学図書館に全部寄贈されました。その後、浅古弘早稲田大学法学部教授をはじめ、関係者のご努力により、資料の整理、目録の作成、マイクロ化がなされ、このたび販売の運びとなりました（雄松堂アーカイブ社より）。

岡松は京都帝大教授のかたわら台湾旧慣調査を主導し、「台湾法典」の編纂に従事しました。また、後藤新平が満鉄の総裁に転じた後は満鉄の理事として、満鉄の経営、満洲の旧慣調査、満鉄調査部と東亜経済調査局の創設に関わりました。その後、後藤が「大調査機関」の構想を立

9 前掲、春山『近代日本と台湾』p.329.

10 中島純『後藤新平「学俗接近」論と通俗大学の研究—夏期大学運動の思想と実践—』中島純・2004年。

11 前掲、春山『近代日本と台湾』所収、「台湾旧慣調査と立法構想—岡松参太郎による調査と立案を中心に—」、「法学博士・岡松参太郎と台湾」参照。

てる時も、立案に関与しています。

岡松は、後藤の政策立案の「ブレーン・スタッフ」でもあったわけです。しかし、帝大の先生が満鉄という営利会社の理事であることに対しては批判もあり、大学当局の変化もあって、岡松は教授と理事をともに辞めることとなります。

彼は、50歳という若さで亡くなったこともあり、その学問的業績は日本の法制史の中でも「忘れられた」ような存在でした。京都大学の歴史の中でも、植民地統治に関わったことが戦後はマイナスに評価されていたようです。

しかし、岡松の『台湾私法』をはじめとする臨時台湾旧慣調査会の報告書、「台湾法典」の法案関係資料、遺著というべき『台湾番族慣習研究』全8巻など、彼の学問業績の本格的な検討と、その現代における利用については、まだこれからではないかと思えます。

岡松の学問は植民地統治政策の一環という性格を紛れも無く持っていますが、その実質的な内容は、「台湾の近代」を「写した」側面を持っており、台湾社会の「歴史像」の再構成、E.H.カーの言う「時代の思想を再現する」材料のひとつではないか、と考えます。

本日のお話は、ここまでといたします。

## 「台湾近代史」と4人の日本人 後藤新平・岡松参太郎・新渡戸稻造・矢内原忠雄\*

春山明哲\*\*

### 第2回 新渡戸稻造と矢内原忠雄—学問と信仰—

はじめに

先日、天気良かったので、台北の植物園に行ってきました。随所に工夫がこらされた素晴らしい植物園です。〈植物名人園〉という一角をのんびり歩いていましたら、偶然にも「霧社楨楠」という木を見つけました。呂福原教授という方が発見され、命名されたらしいのですが<sup>1</sup>、「霧社」という名前が冠された植物を初めて見ました。「霧社事件」を研究してきた私にとっては、嬉しい偶然でした。

植物園といえば思い出すのが、北海道は札幌にある北大植物園です（北大＝北海道大学は札幌農学校の後身）。この植物園は、クラーク博士の建言によって1886年（明治19）に札幌農学校に開設されたもので、同校の第二期生で植物学者の宮部金吾が設計・築造した植物園だそうです。

\* 2008年12月12日於國立臺灣師範大學臺灣史研究所特別演講

\*\* 早稲田大学台湾研究所 客員研究員

1 「霧社楨楠」の説明文によれば“Trees of Taiwan”157号(1988)に關係論文があり、栽植は2000年3月12日とのことである。

クラーク博士を皆さんはご存知ですか。日本では、“Boys be ambitious!”（少年よ、大志を抱け）という言葉で大変有名な方です。クラーク博士は、米国の植物学者で、1876年（明治9）7月に来日、1877年5月まで、札幌農学校で教頭として教鞭を取りました。この言葉はクラークが米国に帰る際に、札幌農学校の一期生に贈った言葉だそうで、恐らくこの言葉を知らない日本の少年はいないでしょう。私も小学校のころ、先生から教わったように記憶しています。この言葉は、後の考証に拠れば<sup>2</sup>、これを聞いた生徒の一人が、内村鑑三が編集した英文雑誌（“Japan Christian Intelligencer”Vol.1, No.2）に掲載したとのこと。この“Boys be ambitious!”には“like this old man”、“この老人のように”つまりクラーク自身のように、という言葉が付いていたようで、私はこの後半がいいと思います。

このクラーク博士は、植物学だけでなく、自然科学全般を英語で教え、また、学生に聖書を配って、キリスト教を講じました。彼は「イエスを信ずる者の誓約」を書き、クラーク自身をはじめ、キリスト教の信仰に入った札幌農学校の学生たちが署名しました。のち、作家の有島武郎が日本語に訳しています。

かつて私は札幌を訪れた時に、「札幌の時計台」（札幌農学校の演武場——武芸練習場兼屋内体育館）でこの署名誓約のレプリカを見たことがあります。そこには、先ほど述べた宮部金吾のほかに、太田稲造、内村鑑三、佐藤昌介らの英語のサインがありました。太田稲造とは新渡戸稲造のことです。この時は叔父の太田時敏の養子となっていたので、太田姓を名乗っていました。後に、新渡戸姓に戻ります。新渡戸、内村、宮部は、いずれも札幌農学校の第二期生です。佐藤は札幌農学校で日本

人としてはじめて植民学を教えた人で、後に北海道帝国大学の総長になった人です。

私は、新渡戸稲造と内村鑑三の署名を見ながら、新渡戸の台湾との関わり、そして、新渡戸と内村を介しての矢内原忠雄と台湾との関わりを、ぼんやりとですが胸に思い描いていました。私が「植民地統治と学問・信仰の関係」について、少しずつ考えはじめたきっかけのひとつは、札幌時計台で「イエスを信ずる者の誓約」を見たことにあります。

今日は、この新渡戸と矢内原について、その「学問と信仰」の台湾との関係を中心に、少しお話したいと思います。

なお、ここにいらっしゃる呉文星先生が「札幌農学校と台湾近代」に関するご高著を数編執筆されていることは、皆さんご存知だと思います。私のお話は「台湾近代史」をめぐる近代日本の精神史・思想史といった観点からの試論です。

### 1.新渡戸稲造について

新渡戸稲造<sup>3</sup>は、1862年（文久2）に、現在の岩手県盛岡市に南部藩士（新渡戸十次郎）の子として生まれました。後藤新平も岩手県出身でした。二人は「東北出身」で、「官軍」に抵抗した「朝敵」と言われた側に居たことが共通点で、このことはのちの新渡戸と後藤を結びつける重要な要素です。

細かい経歴は省略することにします。新渡戸が札幌農学校の第二期生として入学したのは、1877年（明治10）で、翌年には内村らと共に洗礼を受け、クリスチャンになります。卒業後、一時、北海道開拓使（政府が北海道開拓のために設けた役所）に務め、ついで、東京大学に入学

2 大島正健著・大島智夫改訂増補『クラーク先生とその弟子たち』（教文館、1993年）所収、大島智夫「島松の別離—Boys be ambitious!を誰が聞き、どのように広まったか—」参照。

3 『新渡戸稲造全集』全23巻、別巻2冊（新渡戸稲造全集編集委員会編、教文館）。第1-16巻は1969-1970年刊行、第17-23巻は1985-1987年刊行、別巻は1987年、別巻2は2001年刊行。

しますが、その学問に飽き足らず、米国に留学します。このころから彼は、将来は「太平洋の架け橋」になりたい、という抱負を持ち始めたとのこと。「太平洋の架け橋」、日本と米国との良き関係、もっと大きく「東洋と西洋の文明の融合」は、新渡戸の生涯の「テーマ」でもありました。

新渡戸は、ジョンズ・ホプキンス大学では経済学、農政学、歴史学を学び、さらにドイツのボン、ベルリン、ハレで農業経済、統計学を学んでいます。このころ、植民政策研究のため、米国、カナダに旅行しています。ただし、ここで「植民政策」というのは、移民、開拓、農業開発が中心で、のちの「植民地政策」とは異なる内容だったと思われます。

1891年（明治24）帰国し、札幌農学校の教授となり、農政学、植民論、経済学を講じますが、1898年（明治31）に病気になり農学校を辞任し、静養のため再び米国に渡ります。

米国で書いた著作が、『農業本論』、『農業発達史』であり、そして、後に大変有名になった“Bushido”を英語で出版します。“Bushido”は「武士道」で、のちに矢内原忠雄による素晴らしい翻訳が出ますが、その題名から想像されるような「サムライ」の道を説いている本ではありません。私の印象では、むしろ西洋との比較における日本近代史といったもので、新渡戸の歴史知識の該博なことに驚いた記憶があります。

以上が新渡戸の「学問」に関する略歴です。「信仰」については、米国滞在中、1886年（明治19）にクエーカー教徒として認められます。このクエーカーの信仰がどのようなものであるのか私には分かりませんが、新渡戸研究の代表的なひとりである佐藤全弘氏（大阪市立大学名誉教授、『武士道』の翻訳もある）が、「矢内原忠雄と新渡戸稻造」（『新渡戸稻造研究』11号、2002年9月）の中で、「クエーカーと無教会の信仰比較」を論じていますので、興味のある方はご覧ください。

なお、新渡戸は、1891年（明治24）に米国のフィラデルフィアで、メ

アリー・エルキントンと結婚します。

さて、新渡戸稻造と後藤新平との出会い、そして、この二人が終生の交友を結んだことは、「台湾近代史」にとってきわめて大きな意味を持つこととなります。

1899年（明治32）、米国で静養中の新渡戸のもとに、台湾総督府から来て欲しい、との要請がきます（39歳の時です）。新渡戸は二度断るのですが、三度目の後藤新平からの懇請に応じることにします。新渡戸の書いているところによると、「三顧の礼」を断るわけにはいかない、ということと、友人から、かつて「後藤新平」の噂を聞いて興味を感じていた、とのこと。新渡戸は後藤に始めて会ったとき、「給料はいくらでもよい、面白そうな人だから、あなたに仕えてみようと思った」と、率直に述べています。

この「三顧の礼」というものの具体的な内容が、実に「破天荒」というべきだと、私には感じられます。後藤は、新渡戸の熱帯農業の勉強をしたいという希望を入れて、新渡戸を1年間ヨーロッパの視察に派遣します。総督府就任後も、ハワイ、フィリピン、オーストラリア、欧米へと出張し、台湾滞在は意外に短いのです。また、後藤は、本国の役所に交渉して、役人として位の低い新渡戸に破格の俸給を出しますし、体の弱い新渡戸のために昼寝の時間も設けます。

後藤の「人材活用」の方法はユニークなものです。新渡戸は、その経歴から言って、当時の日本の有数の農政学者のひとりではありましようが、農業政策の実務の経験は乏しく、まして台湾のことはなにも知らなかったのです。むしろ、新渡戸に勉強させ、その成果を「政策の立案」に生かそうとしています。これは、一種の「賭け」でしょうね。

前回お話した岡松参太郎もそうですね。岡松も新進気鋭の法学者ではありませんでしたが、植民地台湾についての知識は、すべて台湾で旧慣調査を開始してからのものです。満鉄でもそうでした。「午前8時の太陽」と

って、若い人材を思い切って抜擢しています。後藤は人を育てる才能があったし、また、その環境を大変努力して作っている、ということは言えると思います。

さて、新渡戸が台湾でしたことは、「糖業改良意見書」の作成をはじめとする糖業政策の確立です。もちろん糖業政策の推進は、新渡戸ひとりの仕事でもなく、また、新渡戸の提案がそのまま実施されたわけでもありません。台湾の糖業政策についてはじめて本格的な社会科学的な分析を加えたのは、ほかならぬ矢内原忠雄です。

新渡戸は、1910年（明治43）に「台湾に於ける糖業奨励の成績と将来」という講演を行っています<sup>4</sup>。台湾の産業の「戦略」をどこに置くか、米、砂糖、樟脳、茶の比較検討がなされていて面白いものです。そして、砂糖が有力である、という展望になります。さらに、糖業政策を三段階に分け、第一に農業政策、第二に工業政策、第三に商業（貿易）政策、というように立案していきます。

この中に「糖廊」という言葉が出てきます。「トンボ」というルビが振ってあります。「トンボ」というのは「台湾語」でしょうか？「糖廊」とは、当時台湾で行われていた伝統的な製糖工場で、というより「マニユファクチャー」（家内制手工業）といったほうが実態に近いと思われます。

私の父の故郷は、高雄市の左営の「廊後」というところで、先日、その旧居の家を訪ね、お墓参りをしてきました。昔、私の歴史の先生だった戴國輝さんが、「廊」というのは「糖廊」のことで、「廊後」というのは、「糖廊」の「後ろ」にある、という意味だよ、と教えてくれたのを印象深く覚えています。ついでに「左営」というのは、鄭成功の「左

の駐屯地、兵営」という意味で、「高雄」は台湾原住民の地名「打狗」の音を転化させたものだそうですね。「高雄市左営区廊後」という地名だけで、台湾の歴史が見えて来るような気がします。

新渡戸は、糖業政策が相当の発展を遂げたので、台湾の農民の生活が少しは改善されたと思い、その形跡を見ようと、豚肉の消費量とか、日本の綿布の需要とか、醤油や酒の消費量とか、あれこれ調べますが、判然としません。やがて、小作人が地主から土地を買うことが盛んに行われていることに気がつきます。そして、このことから、糖業政策と土地問題の関係が今後の大きな問題になる、という風に議論していきます。

さて、新渡戸は、1903年（明治36）に京都帝国大学法科大学教授を兼任し、植民政策を講じます。帝国大学で最初の植民政策の講義です。これは後藤新平が法科大学の学長の織田万（おだ・よろず）に依頼した結果の人事です。なお、織田は前回お話した岡松参太郎の台湾旧慣調査にも参加した人で『清国行政法』という報告書を書いています。

後藤は、日本において本格的な植民政策学が必要であると考えていましたし、新渡戸のような学者をいつまでも台湾においておくべきではない、とも思っていたとのこと。翌1904年に京都帝大教授専任となり、台湾総督府の方は嘱託となります（明治39年まで）。

新渡戸の経歴の中で、もっとも有名なのは第一高等学校の校長でしょう。彼は1906年（明治39）から1913年（大正2）まで、一高の校長を務めます。その間、今度は東京帝国大学法科大学の教授を兼任し、植民政策学を講じます。1913年には、一高校長を辞めて植民政策講座専任となり、1920年（大正9）に、国際連盟事務局次長に就任します。

まとめてみますと、新渡戸は京都帝国大学及び東京帝国大学で植民政策学を、通算13年間教えたこととなります。ところがなぜか、新渡戸は植民政策についての「本」を書いていないのです。

新渡戸の講義内容は、のちに、矢内原忠雄が大学の講義ノートを編集

4 『国家学会雑誌』明治43年4月、24巻4号。『新渡戸稻造全集 第4巻』所収。

し、『新渡戸博士 植民政策講義及論文集』（岩波書店、昭和18年）として出版されています（以下、『新渡戸講義・論文集』とします）。その経緯は、矢内原忠雄が「編者序」で書いていますが、それを読むと、どうも新渡戸には「植民政策論」といった著作をまとめる気持ちはなかったらしいのです。このことをどう考えるべきでしょうか。

この『新渡戸講義・論文集』には、「講義」のほか、「糖業改良意見書」、「台湾における糖業奨励の成績と将来」、「医学の進歩と殖民発展」、「植民なる名辞に就きて」、「植民の終局目的」など9本の論述が収録されています。（『新渡戸稻造全集 第4巻』所収。）

このほか、『新渡戸稻造全集』（以下、この項では『全集〇巻』とします。）に収録されている植民政策あるいは台湾関係のものは、以下のとおりです。

- ・「日本の植民」（『全集21巻』。1919年、英国ロンドンの日本協会での講演）
- ・『日本国民』「第9章 植民国としての日本」（『全集21巻』。1912年、米国ワシントンの全国地理学会での講演に加筆したものの。内容は台湾統治関係。）
- ・『早稲田大学課外講義』「読書と人生」のうち「九 台湾の砂糖政策に成功したのも書物の賜物」（『全集11巻』。早稲田大学大隈講堂での講演。）
- ・『偉人群像』「第29章 児玉伯の思ひ出」「第32章 後藤新平伯」「第33章 後藤伯に対する和子夫人の内助」（『全集5巻』。原著の『偉人群像』は、実業之日本社、昭和6年刊行。）
- ・『編集余録』「126 消えゆく「カミ」」「137 ヘルスとイルス」「168 原住民の統治」（『全集20巻』。「英文大阪毎日」の連載コラム。原著は英文。）

矢内原忠雄によれば新渡戸の講義は概念的ではなく「お話式」だっ

たそうで、「实际的教訓」と「学問的刺戟」に富むものであった、と言っています。ただ、大内兵衛（のち、マルクス主義経済学者）などは、「政策意識が希薄」でやや物足りない感じを持ったようです。また、矢内原の思い出によると、ある時、新渡戸は講義の中で、佐久間台湾総督の「理蕃政策」の残酷さについて「仮借なき抑圧という馬鹿げた空想」であるとして、机を叩いて批判したそうです。

ここで、新渡戸の植民政策学について詳しく述べる時間はありませんが、私には新渡戸には、植林地統治、植民政策というものについて、新渡戸がどこか「醒めた感覚」というか、「クールな視点」を持っていたような気がしてなりません。少し例を引いてみましょう。（引用にあたり、現代仮名遣いに改めるなどしました。）

「国家学が生理学であるとすれば、植民政策は病理学である。植林地は一の病的状態ではないだろうか。（略）植林地は性質上一時的のものであるまいか」（「講義」『全集4巻』p. 63）

「思うに、地球は五百万年後には冷たくなるであろう。国家も二万年後には大いに变化するであろう。従って植民問題も消滅するであろう。」（「講義」『全集4巻』p. 167）

「凡そ人類万般の事業中、拓地植民の如く其の終局目的の不明なものはないであろう、又経営の難しいものもないだろう。（略）過去植民の事績に鑑みるに、個人或は国家が果たしてこの目的を達することが出来るか、大いに疑懼の念を持たざるをえない。」（「植民の終局目的」『全集4巻』p. 354）

「植民最終の目的、即ち地球の人化と人類の最高発展とを実現す

るには、少なくとも土地については、世界社会主義の実現を要するだろう。」（「植民の終局目的」『全集4巻』p. 371）

「およそ植民地が——インド、エジプト、フィリピン、インドシナ等も除外せずに——外国勢力によって統治されるのを全般的に嫌うのは、ほとんど疑いない。植民地政府は、被治者の同意を受けてはいない。また、植民勢力は、白人であれ、褐色人であれ、それが託されている民衆の運命を改善するためだけに、犠牲を払って重荷を負うと信じる理由は大してない。」（「日本の植民」『全集21巻』p. 492）

これらは抜書きですから、本来は文脈、文章全体の流れから理解しないとイケないのですが、新渡戸が植民（地）問題について、きわめて長期の展望を持って眺めていること、ということは必然的に「醒めた眼で」見ていることは否定できないでしょう。大内兵衛が感じたように、新渡戸の植民政策論は「政策意識」が希薄な面があると、私も思います。

## 2. 矢内原忠雄について

矢内原忠雄<sup>5</sup>は、1893年（明治26）に四国の愛媛県、今の今治市に生まれ、1905年（明治38）に神戸中学校に入学しました。この学校の校長は鶴崎久米一という人で、札幌農学校の第二期生、つまり、新渡戸稲造、内村鑑三と同期生でした。また、矢内原は中学の先輩を通じて新渡戸や内村の存在を知りました。

5 『矢内原忠雄全集』全29巻、岩波書店、1963-1965年。

1910年（明治43）、矢内原忠雄は一高（第一高等学校）に入学し、すぐに新渡戸校長を囲む読書会に入りました。その翌年には、内村鑑三の聖書の研究会に参加してその門下となり、終生無教会主義のクリスチャンとしての信仰を貫くこととなります。

矢内原は、1913年（大正2）に東京帝国大学法科大学に入学し、今度は、一高校長を辞めて東京帝大法科大学の専任教授となっていた新渡戸の「植民政策講座」を聞くこととなります。

矢内原忠雄は、その信仰を内村鑑三から、その学問を新渡戸稲造から受け継いだ、と言ってもよいでしょう。ということは、象徴的に言えば、矢内原の信仰と学問は、あの札幌農学校に遡る、とも言えましょう。このことを、矢内原自身が意識していたことは、あとで申し上げます。

1920年（大正9）、矢内原は新設された東京帝大経済学部の助教授となり、欧米に留学ののち、1923年（大正12）に帰国し、教授に昇進、国際連盟事務局次長になった新渡戸の後任として10月から「植民政策」の講義を担当することになりました。

矢内原忠雄の生涯を追っていくと、人との「出会い」が偶然なのか、それともなにか見えない神のような手によるものなのか、まことに不思議の感がします。一高・東大における内村や新渡戸との出会いがそうです。そして、また、彼と台湾青年との出会いも決定的なものでした。

1924年（大正13）の春のある日、大森八景坂上の矢内原の自宅に、二人の台湾人の青年が訪ねてきました。蔡培火と林呈禄です。台湾議会設置請願運動に対する矢内原の支持を得るためにやってきたのです。蔡培火の回想<sup>6</sup>によると、矢内原の著作である『植民及び植民政策』を読んで、とっていますが、この著作は1926年に出版されたものですから、

6 蔡培火「神の忠僕矢内原忠雄先生を憶う」、南原繁ほか編『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯』（岩波書店、1968年）所収、p. 94.

蔡が読めるはずはありません。多分、矢内原の東大での講義の内容を、恐らく台湾人留学生を通じて知って、訪ねたのではないかと推測しています。

蔡培火は、その前の年、「治警事件」によって逮捕されました。「治警事件」とは皆さん良くご存知でしょうから詳しいことは省きますが、台湾議会設置期成同盟会を台湾総督府が「治安警察法」を使って弾圧した事件で、蔡は逮捕後の保釈中に矢内原を訪ねたわけです。

1927年（昭和2）3月、矢内原は台湾に調査旅行に行きます。その水先案内人を務めたのが蔡培火であり、葉栄鐘です。もちろん、林献堂にも会っています。矢内原は調査の合間を縫って、各地で講演しています。これも皆さんご承知のように、この頃は台湾文化協会が左右両派に分裂し、左派が協会の主導権を握った直後の時期です。矢内原の講演は総督府の監視と左派による妨害とを受け、彼はたいへん苦労したようです。

矢内原は、調査旅行を終えて基隆から船に乗ると、その日のうちに、蔡培火に宛てて長い手紙を書きました<sup>7</sup>。若林正丈東大教授によると<sup>8</sup>、この手紙で矢内原は「蔡の友情と世話に感謝し、蔡の戦いの孤独なることに同情しつつもこれを励まし、また『議会設置運動を目的とする政治結社よりも言論機関の自由獲得の方が先決問題であり且つ遙かに重要』とする意見を記していた。」ということです。なお、若林先生の『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』の解説は素晴らしいものですので、是非一読してください。

蔡は、矢内原忠雄との親密な友情が続いたことについてこう書いています。

「その訳を考えて見ると、神に対する信仰即ち神の霊の導きが我々の間の友情の基本であったからと思います。神を信ずる真実な信仰によって、矢内原様は台湾の人々に同情を寄せられ、日本の殖民政策をより文明的ならしめようとして批判されたのであります。それで台湾人の為め、日本と台湾との間の関係を改善せんとして努力する私と私の同志多くの者と接触する機会が与えられました。」『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯』、p.94)

蔡が言う「私の同志」に、葉栄鐘さんがいます。いま、葉栄鐘に「さん」を付けたのは、私は葉栄鐘さんにお会いして、親しくお話を伺ったことがあるからです。それは、1974年の秋、日本の千葉県習志野の、戴國輝さんのご自宅でした。当時、私は28歳、国立国会図書館に就職した年で、戴さん（43歳）、若林君（25歳）、松永正義君（25歳）、河原功君（26歳）なども参加していました。我々皆若かった頃のことです。

堀田善衛（ほった・よしえ）という日本の作家に『若き日の詩人たちの肖像』という作品があります。その中に、「若い時にしか見えない星空があるのだ」（正確ではないかも知れません）という言葉がありました<sup>9</sup>。そうですね。「若い時にしか見えない」ものがあるのですね。そして「星空」とはなんでしょう。私には、それは「自分の信ずる道」、「自分が理想として目指すもの」のように感じられましたね。

葉栄鐘さんのお話はとても興味深いものでしたが、それと同時に、今思うと葉さんは、蔡培火もそうでしょうが、「星空」を見た人ですね。

7 蔡培火に宛てた矢内原の手紙は『矢内原忠雄全集 第29巻』pp.61-64.に収録されている。

8 若林正丈『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』（岩波書店、2001年）の解説、p.369.

9 堀田善衛『若き日の詩人たちの肖像』（新潮社、1968年）の冒頭及びp.73参照。「驚くべき夜であった。親愛なる読者よ、それはわれわれが若いときにのみ在り得るやうな夜であった。空は一面に星に飾られ非常に輝かしかつた…」という文章は堀田の引用で、もとはドストエーフスキイの作品『白夜』の冒頭の文章。堀田善衛「『白夜』について」『ドストエーフスキイ全集月報』XV（1970年）参照。

葉栄鐘さんにも「矢内原先生と台湾」という矢内原への追悼文があります。葉さんの謙虚なお人柄を偲ばせる、心を打つ文章です。（前掲、『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯』所収。）

矢内原は、かねてから、聖書の言葉で言う「異邦人伝道」というものをしていようと希望していました。1929年（昭和4）11月末の日曜日の夕方、葉さんは大森八景坂上の矢内原の自宅を訪ね、聖書の講義を受けました。矢内原にとっての「異邦人伝道」の最初の人、葉さんだったのです。

この聖書講義に出たいと希望したもう一人の青年がいました。陳茂源という人です。彼は、東大の学生の頃、矢内原が台湾調査旅行に行く船に乗り合わせ、偶然、矢内原に面識を得るのです。その時、矢内原が彼に聞くのです。「日本人の中に親友をもっていますか」と。思いやりと含蓄のある、とてもいい質問ですね。

陳茂源は、葉さんに自分も聖書講義に出たいと頼んで、ある日の夜、大森八景坂上に行くのです。彼はその時のことをこう書いています。

「当夜の八景坂上の御宅の光景は終生忘れることができない。私は本当に夢見る者のごとく、孤灯のもとにただ一人の異郷の青年を相手に「ルカ伝」の御講義をしておられる先生の真剣な御姿を目撃した。直感的に私はそれまで暗中摸索していたものに突き当たったことを感じた。」（「大森の家庭集会の頃」前掲、『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯』所収。）

陳茂源も「若い時にしか見えない」光景を見たのです。彼は、1952年に『帝国主義下の台湾』の中国語訳を出しています。

私は、矢内原忠雄と蔡培火、葉栄鐘、陳茂源たちとの出会い、矢内

原と「新しい台湾青年」の間の「友情」こそ、「台湾近代史」において「叙述」されるべき歴史の一齣だと考えています。なぜなら、彼らの交友関係のあり方を見ると、「植民者」である日本人と、「被植民者」である台湾人が、少なくとも一対一の間人間関係においては「対等」であった、と思うからです。このことを可能にしたのは、蔡培火によれば「神に対する信仰即ち神の霊の導き」でありました。

そして、「台湾近代史」の最初の「歴史叙述」というべき『帝国主義下の台湾』は、矢内原と蔡培火たちの「信仰に結ばれた友情」がなければ、成立しなかった本でしょう。

矢内原忠雄の植民政策学の全体像やその特質について、ここで話す用意はありません。ただ、矢内原における「学問」と「信仰」の関係を示す言葉を引用しておきたいと思います。彼の『植民及植民政策』には、「愛敬と感謝とを以て本書を/新渡戸稲造先生/に献ず——生徒の一人たりし著者」という献辞がついています。（「新渡戸稲造先生」は大文字。）

そして、本書の最後は、次の言葉で結ばれているのです。

「虐げらるるものの解放、沈めるものの向上、而して自主独立なるものの平和的結合、人類は昔し望み今望み将来も之を望むであらう。希望！ 而して信仰！ 私は信ずる、平和の保障は「強き神の子不朽の愛」に存することを。」（『矢内原忠雄全集 第1巻』p.483）

矢内原は『帝国主義下の台湾』の序でも、この「虐げらるるものの解放、沈めるものの向上、而して自主独立なるものの平和的結合」を引いて、その「実現をば衷心仰望するものである」と述べています。

おわりに

1946（昭和21）年、日本の敗戦の翌年、矢内原忠雄は北海道大学で、学生達に講演しています。今、手元に資料がないので引用できないのですが<sup>10</sup>、この講演は次のように結ばれています。

日本の間違いはどこにあったのか、我々は厳しく反省する必要がある。そして、札幌農学校における内村鑑三と新渡戸稻造の両先生を糧に、ここ北海道の札幌の地から、新しい日本の建設に立ち上がろうではないか。

皆さんが、「若い時にしか見えない星空」を見つめて、「台湾近代史」の新しい地平を開拓していかれることを希望して、私のお話を終わります。

10 矢内原忠雄「内村鑑三と新渡戸稻造」『矢内原忠雄全集 第24巻』（岩波書店、1965年）、pp.385-401。昭和21年9月27日、北海道大学中央講堂における講演。

## 世界文明的興替 與臺灣歷史的變遷\*

蔡石山\*\*

### 一、講者

蔡錦堂所長（以下簡稱蔡所長）、吳文星老師（以下簡稱吳老師）、蔡石山教授（以下簡稱蔡教授）

### 二、演講本文

蔡所長：

蔡教授、吳教授、董教授，還有蔡教授的弟媳婦，各位同學大家好。我們今天很榮幸請到蔡石山教授來跟我們做這場演講，題目就如PPT可以看到的：世界文明的興替與臺灣歷史的變遷。基本上蔡教授是從一個宏觀角度、有高度地來看臺灣歷史變遷，可能可以給我們一個很不同的對臺灣史發展的看法。

在我們開始進行之前，先請吳文星教授來介紹蔡石山教授，因為這次人文季四場演講都是透過吳文星教授安排，使我們能有一個豐碩的成果。今天可以說是四場演講的最後一場，正好吳老師今天能夠來出席，那就把

\* 2008年12月19日於國立臺灣師範大學臺灣史研究所特別演講

\*\* 國立交通大學客家文化學院人文社會學系講座教授